

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第十八卷第一号（通卷第二〇五号）

鈴



ぐるっけ

創刊 17周年

第 205号

5. 2011

俳句雑誌

GLOCKE

すかんぽ

品川 鈴子

幼稚園閉ざしダンス場子供の日

花蘇鉄片頬欠けし義人像

烏麦仏足石の彫り薄れ

紫蘭こぼるる菅公の仮寝岩



十字彫り夜泣き祠にすかんぽ伸び

目高孵りて双目と尾のみ混む

目高仔の微塵ラツシュに水煌めく

目高の餌買ひ物メモの先頭に

涅槃図の鬼^{あお}仰のけに哭き転げ

さくらんぼ女系美系に待ちし裔



玉鈴

吟

兵庫 高橋 大三

須磨離宮まだ蓄なる松竹梅
春節祭椅子六つの上逆立ちす
春節祭のたうつ龍は仰臥もし
舞獅子のなか立ち上がる女高生
獅子舞の四頭すべて女高生

大阪 竹下 昭子

バンダナに帽子もかぶり雪達磨
あげるべきバレンタインチョコ供えたり
ハンガーを鳥啣えて巢作りへ
大仏の厚き唇 春灯
受験子の筆入れミニのズック形

大阪 武田ともこ

豪雪の報蒼天の下に聞く
玉子酒深夜の卓に独り居る
塩鯛なむ襲名高座春近し
雪雲のさしせまりゐて胸さわぐ
忽ちに白銀並木春の雪

愛媛 武智 恭子

院内に正月花が飾られて
日を浴びて水仙が咲く吾樂し
見舞受く石焼芋の甘き味
留守中に庭の白梅満開なり
土堤に咲く水仙の香風運ぶ

大阪 谷 泰子

父の忌や碗にぼつてり寒卵
着脹れて花柄の杖恃みとす
大寒にタクシーを呼ぶ医者通ひ
寒夕焼足の肉芽腫盛り上る
木の芽風頬に受けつつ試歩の杖

兵庫 恒成久美子

冬ざれのカーブゆるりと靈園バス
シネマへと冬のバーゲン横に見て
湯たんぽも様変りしてドイッ製
寒雀庭にちよんちよん撒き餌待つ
坪庭に雀ぼら く 細雪

大阪 角谷美恵子

紅白靴紐確かにバドミントン
笑ふ児の髪をすり抜け春の風
春暁の鐘音かすか谷を越え
脈搏たせ犬は吼えをり春光に
守るもの棄てて圏外恋の猫

愛媛 年森 恭子

苗札のひとつひとつを挿し終へり
春の風邪勤務シフトを入れ替へる
兄弟仲直り首垂るチューリップ
春埃見て見ぬふりの真昼時
草萌ゆる次男の顎に無精髭

兵庫 内藤 三男

枯蓮の濠より暮るる城下町
冬耕のひとりに峽の風尖る
人肌もよけれど熱爛更によし
焼諸の包みやうなき匂ひかな
風花の生れしあたり讃岐富士

兵庫 中尾 廣美

櫓のみ残す城趾に空つ風
足音の止まるを待ちぬ風邪に伏し
降る雪や白き教会白を積む
冬夕日帽子の夫の影長し
露の臺緑重ねて朝の庭

大阪 中島 霞

朝東風や衣桁へ通す玻璃戸開く
早春の衣桁の衣裳萌葱色
笹鳴きやふくら雀に帯結へば
姿見に襟抜く仕ぐさ春めける
替への足袋数寄屋袋に忍ばせて

大阪 中田 寿子

寒見舞何と悲しき文字並ぶ
あかぎれの踵見せ合ふ露天風呂
とんかつと相性の良き蜆汁
マンションや小声で少し豆を撒く
多すぎて食べぬ二人や年の豆

神奈川 永塚 尚代

ジャンボ機の主翼雪富士抱へ込む
城跡は破れ石垣夕時雨
バレンタインチョコのかはりにいなり寿司
箸目の通る参道落椿
重なりて亀の一族春日浴ぶ

大 野口喜久子

芦焼の煙太陽を珠とせり
句帳へと芦焼の灰ふわふわと
芦焼のほてり背ナにも顔も
はだれ雪宗祇の汲みし連歌井戸
これも福眼鏡の受けし追儼豆

兵庫 蓮尾みどり

如月のわれの心に傾ぎぐせ
チヨコレートの銀紙剥がす寒の明け
大試験終えてギターの塵払う
合格子先ずはギターの弦を張り
マトリョーシカ春を取り出す一つずつ

兵庫 長谷川 鮎

曳き綱のとぐる巻き待つ御柱
御柱木遣音頭で動き出す
御柱樹皮の擦れ疵曳かれ行く
一言に揺れる小心針槐
新緑の山隠す雨ストレス学

兵庫 林 哲夫

掘炬燵勤めの子らは文も来ず
二人連れ探梅つゞく五十年
牡丹雪句会の席にすべりこむ
牡丹雪席題急遽変更す
春の夢何か一芸あらまほし

兵庫 林 美智

残り雪高く積まれし温泉郷
凍ゆるぶ気配なき道湯治場へ
景品の小さき湯婆抱きしめて
賀露港でもとむ家苞干蝶
今更に手とり教はる紙雛

愛媛 福島 松子

冬日向宇宙帰りの薔薇香る
縄飛びの母に幼な児駆け込めり
日溜りに母と娘の縄跳び唄
冬凧に鷗集まる防波堤
びつしりと赤き棘持つ冬薔薇

愛媛 福田かよ子

寒晴やへりコプターのよく飛ぶ日
春の雪猿の母子が藪の中
梅かたし喪服の紐を解き落す
春寒し火災でこげし飛鳥佛
ウインクする羅漢もありて霞む山

兵庫 藤井久仁子

大寒の床に高鳴る杖の音
梅を待つ備前の壺を磨きをり
わが動く他音のなし冬籠
畦道に根深大把百円とや
水洩の溜まりをりぬ老会話

兵庫 藤田かもめ

胼返り起る右足二日灸
湯たんぽを抱き寒がり高枕
山小屋の丈余に及ぶ軒氷柱
寒紅の刀自のお点前まつたりと
粉塵を巻きあぐ砂丘春北風

鈴の奏

品川鈴子選

吹雪行く山陰本線唸り声 兵庫 鈴木 愛子

進むほど雪厚くなる段島

「城崎にて」執筆の部屋雪あかり

霜やけを知らぬ母親平成っ子

小綬鶏に行き止りまで来てをりぬ 兵庫 荒木 稔

雛納め婚期といふは今やなく

二月尽髭ばりばりと剃りにけり

幼弾く子犬のワルツ木の芽風 兵庫 太田 實

マンサクの咲き初む宿にたどり着き

喃語にて物言ひさうに柿芽吹く

金雀枝のこころが浄土と咲きにけり

妻とみて千年藤の香にひたる 兵庫 平田恵美子

馬櫓に遊ぶ家族の中にゐて

容貌に見惚れて馬券櫓の道

ばんえい競馬二つの息の整へり

雪焼の片頬しかと熱をもち 大阪 丹後みゆき

大阪

丹後みゆき

時忘れ姉妹で語る春の雪

春寒や厚くとじたる我がカルテ

三色の菱餅屈き母思ふ

迷ひ猫追ひ出す騒ぎに春日暮れ 東京 遠藤とも子

この橋を渡れば千葉県春の河

雪も灰も小さき島にもう降るな

かるた会「儀同三司の母」でとる

広重の馬子唄聞こゆ春隣 兵庫 武田 貞子

蹲踞に薄氷つつく雀二羽

縁に立つ足裏にほのと春の音

はじめての大雪チワワ踏み出せず 香川 吉井 潤

盆梅の香りなつかし湖の国の

黄砂降りふりまわされる日本国

太陽のあたるとこだけ春の庭

父の唄ヤンシュが来るとも唄う

ラグビーに負けし子の食進まざる 兵庫 猿橋二三雄

二月来る植付予定決めねばと

兵庫

猿橋二三雄

櫻道花の咲くごと春の雪

春泥に長靴重く捗どら

冴返るガス星雲のオリオン座

立春の三日月金星寄り添える

春立ちし窓辺横切る鳶の影

日溜りの野良猫居場所定まりし

引越しに隣の子猫ついて来る

新築の水仙明り古机

あつあつふう三千院の大根たき

水温む新居の住まい方に馴れ

海峽を行き来する船春の旅

三ヶ月臥して居る間に薔薇芽吹き

草の芽を踏みて歩ける老いし足

水仙は遅れて花芽足はこび

高嶺星二つに切つて蜜林檎

薔踏みにはとり小屋にかがみ入る

杉の秀にかかる夕星雪解川

春の泥疏菜運べる猫車

釣竿の先に結ばる凧

猫の恋昔語りに思案橋

さへづりやポストへ急ぐ切日

兵庫 澤浦 緑

大阪 宮村フトミ

兵庫 伊藤 公女

兵庫 櫻木 道代

兵庫 岡村 尚子

ふるさとの山の噴煙冴え返る

お年玉どの子もそつと中覗く

亡兄の冬コート着て肩重し

春一日ケーキ作りに挑戦す

春めきて老い扱いを嫌う友

いとし追ひこいし逝きけり白障子

ころぶなど越後の人の雪見舞

春を待つ甕の泥鰯に餌を落し

鈴鳴の鈴の音聴かん春の空

水仙はおまけと路辺の野菜売り

小流れに蠢くものや春浅し

梅真白楳に透ける空ま青

梅一分べつかふ店で目の保養

一分咲く梅はこれより人出待つ

麗かやリフォームプランのあれやこれ

繋ぐ手の振り解かれしうららかさ

隣人の突然の死に雪が舞う

立春の日溜りの中佇みぬ

雪明り不幸が音を立て、行く

帽子飛び拾いに行きて福寿草

神奈川 山本久美子

埼玉 松岡 水学

東京 木野 裕美

堤 節子

樋口 正輝

秀
鈴
記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十五句 武田 ともこ //

*選句は全て 品川鈴子

霜やけを知らぬ母親平成つ子

鈴木 愛子

霜焼とは酷しい寒さで手足耳鼻の先が赤く腫れて痛痒くなる軽い凍傷。小児に多いが霜焼を体験せぬまま成人し、結婚や育児期となった若い母親は平成生まれ、何と順調で平穏な時代の申し子でしょう。昭和の御代から思えば温室育ち。戦と言う人災を免れたのに、今春は東北関東を突如天災と人災が襲い「平成」の年号を塗り替えた。

雛納め婚期といふは今やなく

荒木 稔

雛飾りは女兒の生涯の幸せを願う行事として親心を込めた。女は早く良縁に恵まれるのが何よりの幸運とされた時代には、雛納めが後れると縁が遅くなると云うので、早い目に雛人形は箱に納められた。でも女が自立し社会に出る今では、結婚の適齢期は在って無き様なもの、女の幸せも多種多様となる。

喃語にて物言ひさうに柿芽吹く

太田 實

柿の新芽が吹き出す様子は、嬰兒がまだ言葉にならぬ声を、しきりにあげて心を伝えたがるような、べちゃくちゃ喋るもどかしさ。やがて命の勢いが漲り睦まじい囁きともなる。この艶やかさは柿若葉の他に無い。

ばんえい競馬二つの息の整へり

平田恵美子

帯広で開かれている世界でも珍しいというユニークなばんえい競馬。走るといふより重たいソリを曳いて坂を上つて下る馬力を競う。サラブレッドの二倍の馬体ながら、勝敗を決するのは人馬一体となることだ。二つの息がびつたり整つてこそゴールが見える。作者はその瞬間をとらえたのだ。

春寒や厚くとじたる我がカルテ

丹後みゆき

呼ばれて診察室に入ると机の上にはカルテが山と積まれてある。その中の一冊をドクターは開いていて、`どうですか`と問う。カルテは長い間の闘病のあかしである。思えば厚くなったものだ。カルテは人生の記録でもある。病院にあるだけでなく、家にも備えておきたいくらいだ。

迷い猫追い出す騒ぎに春日暮れ

遠藤とも子

ここを住処にと決めた猫は手強い。以前、迷い子猫が裏口に居座って追い払ってもすぐ舞い戻ってきていた。当時は飼ってやれる状況でなかったので、あした遠くに捨てに行こうと心に決めた途端いなくなった。猫は魔性である。春日が暮れても追い出しに成功したのであれば重畳である。

蹲踞に薄氷つく雀二羽

武田 貞子

庭に面した縁側の端あたりに蹲踞がある風景は昭和生まれには見慣れた日常の景色だ。日本家屋が少なくなっていく平成の御世では路裾に張る薄氷やその縁に遊ぶ雀の愛らしさは懐かしい風景になってゆくのであろうか。

黄砂降りふりまわされる日本国

吉井 潤

ゴビ砂漠の土がこの日本にまでやってきて日常が乱される、ホントに迷惑なことだ!と思っていたけれど、福島原発事故を隣国の人々はどう思っているだろう。命が脅かされると感じているのだろうか。この地球はなんと狭いことだろう。いまあらゆる意味での共生が真剣なテーマになる時であらう。

樺道花の咲くごと春の雪

猿橋二三雄

この間降った雪はことのほか美しく樺並木を変身させて真に花が咲いたようであった。メルヘンタッチの絵本がそのまま実物大で立ち現れ、その中に吸い込まれそうだった。朝のひと時静寂の中に異世界の存在を感じたのに、午後になると花はくずれて普通の雪道になっていた。(以下略)